

あめふるくもからかおだして

さーっ、って音が、頭の中に響いている。

薄いタオルケットを通してやってくる、なまあつたかくてイヤな空気が。人間の姿のはずなのに、羽毛に絡み付いてくる感じ。

目なんか開けなくなっただってわかるぞ。こりゃあ

「あゝ、まーた雨がぁ」

「そーそ。アメよ、ア・メ。」

ほらちやつちやと始めなさいよ、シロツ、プっ!!」

いきなり聞こえてきた声と一緒に、からだがあふわつと持ち上がった。

とっさに羽根を開いたけど、タオルにさわったのは腕の感じ。ってことは やばいっ!!

「うわぁぁぁっ!!」

開けた目の前で、部屋が回転してる。今まで寝て

たベッド、横の窓、天井、ぐるっとまわって女の顔、それから 床!

ドスン!

ツツ、痛ててて ちくしょう、シーツごと放り投げやがったな、こいつ!

「無茶な起こし方するんじゃない、くるみ!」

床からからだ半分起こして見上げた先に、エプロン姿のくるみ。腰に手あてて、こっち見下ろして、

「いつまでも寝てるほうが悪いわよ。今日のお昼からバイトでしょ? 時間がないんですからね。とっととキッチンに来て、はじめるわよ」

言い放つたら、さっさと部屋でいきやがった。

どうせこいつにや、わかりやしななんだろっけどな。それにしても

「はあ、どうすりゃいいんだろっなあ、ったく」

3 あめふるくもからかおだして

思ってたよりきれいだわ。

キッチンに入ったあたしの頭に、最初に浮かんだのはそれだった。

昨日まで、お泊りでかれんに勉強してもらってたんだもの。その間どんだけ汚してるかと てつきり、焦がした鍋の山でも作ってるかと思っただけだ。ナッツハウスには、30個はあったはずだもんねお鍋。

コンロにはきれいな鍋に木のしゃもじ。シンクの上にはキャンディづくりの本がひとつ。テーブルの上のクロスはおろしたてのぴっかぴか。でもちよつと焦げくさい、か。

はあ これはきつと、なにもかも失敗してまるごと片付けたあと、ってことね。ほんとにもう、しょうがないんだから。

2日よ、2日。たかがアメふたり分に、なにやっ

てるんだろ、もう。

「ああ、なんだってこんなヤツにあげたりする子がいるのよ、うちの学校はあ」

「そんなんじゃモテないわよ、シロップ？」

きっかけは そう、おとといのお昼よ。

テストもあと1日。ひと足先にテストが終わった高等部のかれんたちもやってきて、終わったらどこ遊びに行こうか、なんてみんなで話してたとき。

「そりゃあ、モテるのがオトコのすべて、なんて言わないけど。同じパルミエ王国の一員としては、ちよつとはモテて欲しいのよねえ？」

こまちが持ってきた雑誌の、男の子のファッションで盛り上がった横を、Tシャツにジーンズ姿のシロップが通り過ぎたから、つい言っちゃったのよね、あたし。

そしたら、シロップがふてくされた顔で言ったのよ。
 「うるっせえよ、くるみ。オレだってなあ、バイトしてると色々あるんだぞ。だいぶ前だけど、わざわざチヨコレート作って持ってきてくれた子もいたしな」
 チヨコねえ。もの好きもいたもんだわ　　って、チヨコを？　作って!?

「ちよ、ちよっと、それ　　うわわっ!」
 言いかけたあたしの背中に、なにかのしかかってくるきた!?

「なにそれっっ!!」
 ——っっ!!　耳の中が痛いわ。乗っかってきたうらがが本気で大声出すんだもん。　　そりゃ、気持ち悪はわからないこともないけど。

「シロップ、それっていつ?　もしかして、2月?」
 背中のうららを手で押さえてあたしが訊いたら、シロップが目え白黒させながら顔いたわ。

「2月の　　14日とか言わないわよね?」
 「よく覚えてねえけど、月の真ん中くらいだったし、

そうかもな。14日だと、なんかあんのか?」

横で肩を落としているのが気配でわかる。そうだった、そういうヤツだったわよ、シロップは。

「ちよっとあ、あたしたちもあげたでしょうが。特製チヨコがけホットケーキー!」

「ああ、ちよっと甘すぎのあれ　　あ痛ててっ!」
 飛び出してきたりんが、シロップのほっぺたを両側に引っ張ってる。まあそうよね。わざわざシロップのためにホットケーキにしようっ、って言ったの、りんだもの。

でも待ってよ、そうすると

「まさか、3月になにもしてない——?」

きよとん、とした顔を見てると頭が痛くなってくるわ。背中から5人分の殺気も感じるし。

「シロップっっ!!?」

「な、なんだよおまえら、顔が怖いぞ」

自業自得だけど　　さすがに、これはちよっとマズいかも。と思ったら、

5 あめふるくもからかおだして

「ち、ちよ、ちよつと落ち着きましようよ？ ベつにわ、悪気があつてやつたわけじゃ、ない ないよね、シロップ？」

そつ言つて、うららがシロップの前に出てきたわ。

一番あわてる子が言つても説得力ないけど、みんななんか拍子抜けしちゃうた。結果オーライ、ね。

「盲点だったわ。ミルクも、ココたちも知ってるから、シロップも知ってるものだとばかり思つてた」

「そつね。よく考えたら、前の2月にはいなかったんだし、お返しの風習があるのは日本だけだもの、知らなくて当然なのかもしれないわ」

かれんとこまちがあきらめ顔で話してるのを聞いたシロップが、おろおろしながらあたしの方に寄つてくるし。

「おい、くるみ。オレ、なんかヤバイことしちゃつたのか？」

「女の子的には、
Yes
」

ひそひそ声になつてるのは、マズいってのがわかつてきた証拠よね。

「返さないダメなのか？ そついうことはまっ

と早く言つてくれよ。食つちまつたじゃないか」

あゝあ、そのまま返す気になつてるわ。さあて、どこから教えてやるつかしら、つて息すつたところにて、だれにもらつたんですか!？」

あたしのわきから、ぼそつ、と声が出てきた。

うららの、小さくてもよく響く声。

「去年の1年生だろ？ うららと同じ服だつたからな」

「学年じゃなくて、だれ!？」

まだ小さい声だけど、目が血走ってるわよ、うらら。

まあ、あたしもジヤマする気はないけどね。

「京子ちゃんと夏子ちゃんだわ。やつぱり」

チヨコあげた子の特徴聞いて、うららが考え込んで、ま、い

いわ。放つときまじよ。

それより、その子たちのために、ちゃんとフォローしとかないかね。

「シロップ、いい？ 2月14日にチョコもらった男の子は、3月にアメとかをお返ししなきゃいけないの。それがこの国での礼儀よ」

ま、こんなものよね。好きだの恋だの、シロツブガキんまにわかるわけないもん。

「じゃ、今からじゃあ」

「3ヶ月過ぎてンだよ？ 当然、遅すぎるわね」

突き放してみたけど、真つ青な顔になってあたしたちを見回してるシロツブを見てると、さすがにちよつとかわいそうね。でも、みんなきれいになんて治ま
んないわ、どうすれば

ダンッ！！

「うん、お返ししよう！」

テーブル叩く大きな音に、はつきりとした大きな声。

話し合ってたかれんにこまち、ぶつぶつ言ってたりに、考え込んでたうららまで、一斉にこつち向いたわ。いまの のぞみ？！

「3ヶ月たってたっていいじゃん。シロツブはいい子だから、手作りチョコにはちゃんと手作りでお返しするの。けつて〜いっ！」

いつの間にか、あたしの後ろに立ってたのぞみが、片手を挙げて明るく言った。

あつきれたもんだわ。もつ3ヶ月よ、3ヶ月。そんな間抜けなお返しなんて さつすが、のぞみよ

さあ、そうとなつたらあたしもやらなきゃ。

「うらら、あげた子たちに言い訳しといてー！ ええと そう、海外にいたからよく知らないとかなんとか！ かれんは材料お願いね。りん、キャンディ作りの本持ってたでしょ？ あれ貸してー！

で、シロツブ

ぼかん、と口開けたシロツブに顔めいっばい近づけて、あたしは大きく息すった。こんくらいいしなきゃ、

7 あめふるくもからかおだして

わかないもんね、こいつには。

「あんたはしばらく配達のお仕事禁止！ お返しのアメ作るまで、この家出ちゃダメよ。いいわね!!」

「それから、2日なのよねえ」

みんなナッツハウスから引き上げちゃって。テストもあつたけど、外野にじやまされずに作ってもらうつもりだったのよね。それが、2日もかかってこの状態なんて。

「寝ても考えちゃっててさ。そこまでぶきつちよだとは思わなかったわ」

おもいつきり寝顔が曇ってるんだもんね。まるで、いまの空みたい。見てたくないから、思わすふつとばしちやったじゃない。ココさまがいなくてよかった。

まっさらなキッチンの中で、りんに借りたキャンディづくりの本のカラフルな表紙が場違いに見えるわ。

いきなり難しいレシピでも試したのかしら？ も

らつたの、結構おいしいチョコだったみたいだし、シロップも、あれで割と気にする方だからなあ

「雲突つ切つて、上にいきなり出よつたつて、できるといけないじゃない」

さっきの寝顔思い出しながら窓の外を見てたら、思わず口に出ちゃった。

雨は止んだけど、すつごく厚い雲、よく飛んでんだもん、そのくらいわかるでしょうにね。

「ちょこつと顔出すくらいでいいのよ。顔をさ。それだつて、雲の上に出たことにはなるんだからもう、融通ゆうちゆうきかないつたら、あのガンコ鳥は」

あんたの手作り、つてだけで大喜びのはずよ、チョコくれた子たちは あたしには全然わかんない趣味だけだ。

でも、仲間が喜んでもらえるのを見るのは、悪くないんだけどな。

「ふあ あゝあ」

あ。よーやく降りてきたわね、あのポケ鳥。

それにしても、なによこの声！ポケ鳥だからって声までポケなくてもいいじゃないの。せつかく人が心配してやってるってのに

「さっさと来なさい！今日のお昼に、あの子たち学食のテラスに呼び出してるとんだからね!!」

バタタッ！って、階段踏み外した音がする。

まる2日も無駄にしてんだから、当然の報いね。

「ほんや、これじゃうらららに合わせる顔がないわ——」

「すみませーん」

昨日の午後、テストが終わったあたしたちの教室に、うららが飛び込んできたのよね。

「こーら！小々田先生に見つかったら怒られるぞあ」

上級生ぶってりんが言ってるけど、説得力ないわ。いつもは自分の方がよっぽど走ってるんだもの。

あ、息ととのえて、上げた顔が少し赤い。抗議しようとしてるな、これは？

「はいはい、わかってるから。それで、例の子

たちには説明できた？」

「ええ。なんでわたしが説明するの、って詰め寄られちゃいましたけど」

ふう。思わずため息ついちゃうわね。お願いしたのはあただけけど、よく考えたら

「まあねえ これじゃ世話女房だもんね」

ぺろつと舌を出してるうらら見てると、わかかって引き受けたのかも、とか考えちゃうけど まさか、ね。

「世話によーぼー結構！みんな、によーぼー候補だもんね♡」

うわあ。さっすが、のぞみ。空気読んでないわ。りんまで一緒に赤くなってるじゃない。

「と、とりあえず、そっちがOKなら、あとはシロップだけよね。明日の朝にでも、あたしが様子見に行くから」

言ったとたん、うららの顔がちよっと曇った。ほんとは今から行きたいんだろっけど

「あー、そっつい顔しないの。自分のために仕事ほっぽられて喜ぶヤツじゃないでしょ？ シロップはさ」

「そうですね うん、お仕事がんばります！」

そーそ。その方がずっと喜ぶわよね、あのお仕事大好き鳥は。

それじゃ、お膳立て整えてあげましょっか。

「うらら、明日は仕事ないんでしょ？ その子たち連れて、お昼にテラス行って。シロップ、明日からバイト復帰だから。そこで渡してもらっわ」

うららにお仕事用じゃない笑顔が戻ったの確かめて、あたしは胸を叩いた。

「明日で大丈夫？」

隣からりんが心配そうに訊いてきてるけど、あたしには自信があった。シロップの手はわりと細かい動きできるもの。高級料理を作れ、っていうならともかく、アメくらい、ねえ。

「もちーダメでも、このお世話係一筋のミルクさんがいるんですからね。さあ、うららは余計なこと考えないで、しっかり仕事して で、明日を楽しみにしてなさい♡」

って、言っちゃったんだよねえ。

だつてまさか、まだ終わってないなんて思わないじゃない？ ひとの信頼、どうしてくれるのよ、あいつはあつ!!

「学校のテスト、やっと終わったんだろ？ オレでストレス解消してんじやねえだろうな、くるみ？」

腰さすりながらやっとキッチンに入ってきたシロップを見て、あたしはまたため息ついた。まったく、軟弱なんだから。

「そのくらいでストレスたまったりしないわよ。学校に残ったのだから、ココさまが『せめて中学卒業までは一緒に勉強するといいいよ』って言って下さったからなもの。

それに、勉強はかれんも見てくれて　　って、ちよつとシロップ、聞いてんの？」

ココさまのお言葉を思い返してちよつと目をあげたら、きよるきよる周り見回してる。まったく、このボケ鳥はっ！

「そついえは、ココは？」

ああ、そついうこと。

そつか、ここ何日かテスト週間で、学校でのバイトはお休みだったっけ。知らないのは当たり前よね。

「小々田先生はテストの採点で学校よ。お世話役としてはお手伝いしたいけど、あたしも生徒だからそ

うもいかないわ。その分、こつちを指導しないとね」
思わず指を鳴らしそつになるのをガマンしてたら、シロップの肩ががっくり下がったわ。

「指導、ねえ　　」

ため息まじりにこつち見る視線が、なんかムカつく。あたしだって好き^す好^{この}んで教えよう、ってわけじゃないのに。

ああ、ココさまあ——

「のぞみに聞いたけど、シロップがキャンディ作ってるんだって？」

教室でうららを見送ってから、あたしはかれんの家に向かおうとしたのよね。もう一日お泊りして明日の朝にはシロップの様子見なきゃ、って思ってたよ。

でも、その途中でココさまにお会いできたのよ。
「ええ、ココさま　　2日もあれば、いくらシロッ

プでも作れてるはずすわ」

「悪いね。僕らが教えておくべきだったよ」

「ああ、お優しいココさま そのココさまに、こんなこと言わせるなんて、シロップのヤツ！」

「そんな … 悪いのはあのバカ鳥です。ココさまは …」

あたしがそう口にした瞬間、ココさまのお顔に苦笑いが浮かんだわ。ああ ココさまはそんなお顔もすてき

「そう言わないで。あいつは結構、ひとの気持ちに敏感だからね。僕は先生の立場があるからあまり動けないし、なんとかフオローしてくれないかな」

苦笑いが消えた顔の中で、きれいな瞳がまっすぐわたしを見つめてる わたしは、思わずたおれそうになるのをぎりぎり我慢した。ココさまのお願い、そうよ、これはわたしの使命なのよ、ミルク!!

「は、はい、もちろん！このミルク、ココさまのた

めなら、バカ鳥でもボケ鳥でも全力でフオローさせていただきますわ!!」

え
って、そう言ったわよ。ええ、確かに言ったわ。でも、いつからココさまのためっていったってね

「ほら、材料の追加よ。もう、たった二人分のアメ玉に、お砂糖何キロ使ってるのよ!」

足元に置いておいた材料をシンクの脇に持ち上げて見せたら、ウンザリした顔が返ってきた。あー、もう、イライラするなあ!」

「そもそもね、2日もかかってできないってのがおかしいの! 砂糖にジュースにお水を入れて、沸かして溶かして冷やして固める! それだけでしょーに」

「んなの、わかってんよ」

わかってんならやんなさいよね。はあ。

もう何回目かわからないため息ついて、上げた目の先に時計が見えたわ。

お昼までそんなに時間もないし　もう、しょうがない、か。

「まったくもう、こんな簡単なこともできないの？　いいわ。ぶきつちよなシロップのために、くるみお姉さんが、かゝんたんレシピで作ってあげる」
あんたみたいなシロウトが作ったように見えるのをね　って、それはさすがに口に出せないわ。

チヨコの子たちは、シロップの手作り待ってるんだもの。ホントはこんなズルしちやいけないんだけどな

「難しいことなんかひとつもないわ。砂糖たっぷりお湯に溶かして、火にかけて　」
ちらつと横目で見てみたけど、シロップ、見た目でわかるくらいいしょげてるわ。

バイトに行く格好のまま、両方のポケットに手を入れて、うつむき加減であたしの手元を見てる

ま、反省だけはしてるみたいだし、これ終わったらホットケーキでも食べさせてやりませうか。このままアメあげても、相手の子が心配しちゃうもんね。
つと、そろそろかな？

「ほら、ぶつぶつ泡立ってきたでしょ？　そしたら混ぜて混ぜてませう

ほあら、きれいな色。あめ色って言うの——」

「茶色がアメ色!!!」

び、びっくりした。なによ、いきなり？

「ちよ、ちよつとまで！　それって、失敗じゃないのか!?!」

いままで下向いてた顔を跳ね上げて、鍋の前にかじりついちゃってる　なに？　失敗???

「アメはあめ色に決まってるじゃないの。あんたが作るよつなのは」

やっぱり勘違いしてるんだわ、自分のうで。どーしてこう、カッコつけたがるのかしらねえ。お店で売

のとシロウトが作るの、同じになるわけないじゃないの。

おとなしく、頭の先だけ雲から出してる、ってのよ。「なんだよ、それ早く言ってくれよ。なんで作り直したか」

え？

いきなり顔が明るくなったと思ったら、テーブルクロスを、ひょいっと持ち上げて 出てきたのはお盆。その上にカラフルな何かが入った袋がいくつか、って ちよっと、ええっ!!?

「ほら、これおまえの」
へ？

一瞬、目の前に出されたものがわからなかったわ。よく見れば、ビニール袋の中にアメ玉いくつが。少しあめ色がかってるけど、割ときれいな紫色のん？ むらさきい!?

お盆の上をもう一度見て、あたしは開いた口がふさがらなかつた。

なんで気がつかなかったの、あたし？ ピンクに赤に黄色に緑に青。これって

「言いなさいよ、最初っからあっ!!」

じゃ、じゃあ、2日もかかったのって」

「ああ、その2人の分を何色にしたらいいか、わかんなくてさ。仕方ないから透明にしようと思ったんだけど どうしても色がついちまって」

あっされた。そんなことで悩んでたの、2日も？

「自分と同じ色だからって、誰も気にしたりしないわよ」

「お前もあのうらら、見たろ？ いい加減なことしてみる。あとで何されるかわかったもんじゃねえぞ、あの目は

つと、こうしちゃいられないや。バイトバイト」

お盆の上の、あめ色の袋ふたつポケットに入れながら、シロップがこちをちよっとだけ振り返って、「それ、みんなに渡しといてくれな」

そう言つと玄関に向かつて走ってく っ、な

によ、その二つだけ!?

「ちよつと、こらシロップ!」

これくらい、自分で渡しなさい、よつ!!」

あたしは近くに見えた袋を一つひっ掴んで、玄關
開けようとしているシロップの頭めがけて投げつけた。

「つっつ!」なに あ、黄色?」

よし。命中!」

「ちゃんと、ひとりのときに渡すのよ? 他の子と
一緒にいるとき渡したりしたら、あとでぶん殴って
やるから。覚悟なさい!」

あたしが腕組んでそう言っただけで、シロップつ
てばアメとあたし、代わる代わる見て、ちっちゃん
声で「あと、頼むな」ですって。

笑うの我慢するのに苦労しちゃうじゃない。

「はいはい、あとのことは気にしない。お世話係の
手際にまかせなさいって」

「悪い、ほんとに」
ん?

玄關の向こうに、シロップの姿が小さくなってく。

あんなこと言うなんて、珍しいわね

「ま、少し」コさまに近づいてきたってことかな

ツメの先くらいは、ね」

開けっ放しの玄關を閉めながら、あたしはちよつ
とだけ笑いを我慢できなくなつた。

「ふふっ」

また、ちよつとだけ口元が笑っちゃたわ。

キッチンに戻る途中、でこぼこな紫のアメの、ジュー
スとカラメルのあいの子みたいな味が口に広がった
から。

きつと、喜ぶだろうな。チョコあげた子たち

と、うらやま。

やっぱり、喜ぶ人を優先させたいわね。お世話役
としてはさ。うん。

さて。それじゃ、その他大勢用のアメは、あたしが配りますか。これも、お世話役のお仕事、つてもよね——

ガタンッ

ん？

キッチンに戻ったとき、腕が何かにひつかかったと思ったら、割と大きな音がした。見たらただのテーブル。なのに、なんか、ナナメになってる？

って、そもそもテーブルがなんか高いわね。さつきから、ちょっと気になってはいたんだけどなにこれ？ テーブルの上に板、じゃなくて、足の低いテーブルが乗ってるわ。ちゃぶ台？

嫌な予感がするわ。そう言えばあいつ、さつきこの下からアメ取り出してたわよね

「えいつ！」

きれいなテーブルクロスを、その下のちゃぶ台ごと持ち上げた瞬間、あたしの手から力が抜けた。

「な、なによ、これーっ!!」

落っこちたちゃぶ台が大きな音を立ててるはずだけど、あたしには聞こえないわ。

朝きたときから変だとは思ってたのよ。ちょっと焦げたような、この匂い。でも、まさかこのキッチンにあつたお鍋、30個みんな？

(悪い、ほんとに)

シロップの言葉が、あたまの中で聞こえた。

「あんな一言とアメだけで、これ全部片付けろ、ですってえっ!？」

口の中でころころいつてた紫のアメが、言った瞬間、口の中ではじけた。

「シロップ　のお、ドあほおーッ!!」

—おしまい—